

奥三面へ

03-07-17(木)～07-21(月)

1



165

3 2

選ぶ

サイトへ戻る

十七日(木) 曇りときどき晴れ

朝、早めに起きて準備を始めたのに出発したのは午前十一時だった。当日にいろいろ思い付いてあれこれやっているところなる。日が照り出すと景色はすでに夏だ。道路は照り返り、木々の葉はきらめく。恵那山^{SA}で昼食。ウィークデイの昼間は年配の二人ずれが多い。走り出すと、やっぱり眠くなった。昨日はアイスポックスの中の中蓋を作っていて、つい夜半まで起きていたからあまり眠っていない。また、駒ヶ岳^{SA}に入っとうとうととする。30分ほどして車から出るとすぐ前の垣根の下にオレンジ色の百合の花が咲いている。(写真)。



十八日(金) 晴れ

信州中野^{IC}を出て^{IC}7号線を走る。途中、ナビの表示に従って進んでいくと脇道に入ってしまう。両側に民家の並ぶ細い道。道路の中央に融雪用の水を出す設備が続いている。これは地域の生活道路なのだ。今朝はまだそれほど急ぐ必要もないから、しばらくこういう道を走るのもいい。やがて線路の踏切に出る。これまで右手の民家の裏を列車が走っていたのだ。踏切を過ぎると千曲川に近づいて橋がある。ナビの表示に従ってそれを渡ると^{IC}1号線に戻る。「道の駅さかえ」というのがある。こ

こはまだ長野県だ。店の前に土地の人が野菜を並べている。たまたま、二、三人でカボチャの話をしている。「揚げるより煮た方がいいっていうから煮たら、やわらかくておいしいっていったよ。」カボチャは小振りで黒っぽいほど濃い緑色をしている。

津南町歴史民俗資料館は国道から少し離れたところにある。ナビのゴールは国道沿いの役場だった。役場では「少し戻っていただけと秋山郷へ向かう表示がありますからそれを左に行ってください。その途中にありますから。」と教えてくれる。歴史民俗資料館の敷地に入っていくと目の前に大きな民家がある。茅葺きの屋根には、正面から見たちょうど中央に横長の穴が開いている。(ああ、あれがトタン屋根に吹き替えたときの流れ高まるもどったのだ。)と、おもしろく思う。資料館は白壁の大きな土蔵のような建物で、渡り廊下で収蔵庫に続いている。

窓口で入場券を買う。お金を出して側を立てかけてあった道具を倒してしまう。受付の女の人が「こちらこそすみません。」といてあわてて出てくる。「土器などたくさんありますか。」「ええ。中国に行っていた火炎土器もちょうど帰ってきています。」「ほう、中国まで持って行ったんですか。」「ええ。でも、例のSARS騒ぎで実際には展示ができませんでした。」「庭にある民家はいつ頃ここに移築されたんです。」「と聞く。あの民家は200年も前からここにあって、しばらく前まで実際に住まいとして使われていたものだという。展示室は三階だった。階段が上がったすぐの戸棚に、もう白く補修された土器が並んでいる。入り口を入ると、室内には壁面周囲の展示と中央の展示棚があり、その間を一周して入り口にもどるようになっている。

空間にあふれ出す立体[△]図[▽]161。かたちが定まらな
いで今にも溶け出しそうな姿だ。石膏でたくさん追加しているが全体はみごとに復元されている。器の赤い肌はひどく粗い。これは粒子の粗い粘土が使われたか、ながい時間を経るうちに表面のわずかなやわらかい部分だけが失われたか。出土した部分によってほぼ原型を見せているのは四つの大きな突起のうちの一つだけだ。あとの



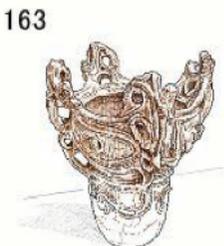
三つは大部分を石膏によって追加している。これは、遠いむかしの作りのイメージを追うことのできる復元者との共同作品だ。追加部分は着色されていない。どんなにみごとに復元してもその作業にはかつてこのかたちをつくり出した者への謙虚な気持ちが必要だろう。追加する部分に白を使うことは復元時の追加部分を明らかにすることとそれが実際のかたちではなく実際に近いかたちであること示すよい方法なのだ。

華やかに縁を飾る浅鉢[△]図-162。こんなかたちを後の時代の材料で作り返えたら立派な盛り皿になる。たとえば白磁か青磁。それなら、縁の張り出しはもう少し控える。

文様が側面から張り出した土器[△]図-163。四つの突起は、口縁部に立つというよりも側面の張り出しが上に出たというふうだ。張り出しのラインの多くは例によって側面や口辺の文様から這い上がっている。どこもかもつながっている。だから、すべては部分ではなくて全体の一部分なのだ。ラインの太い紐のわきに細い紐が沿う。その変化が容器の姿をおもしろくする。上からのぞくと中は二段にくびれて十分に広い。

これは「火焰型土器」と表示される[△]図-164。この姿はなぜか固い。縄文のなめらかに流れるラインやその不思議な連続は目立たなくなっている。全体が意匠の展示場だ。何世代も重ねてかたちを伝えてきた人々が次々にこれらを加えてきたのだろうか。容器の側面では口辺の模様をそのまま下に影のように写している。伝えていく途中の誰かがこの気の利いたことを思いついたのだ。あるいは、この模様たちには意味があつて、もともとそれぞれの場所に置く必要があつたのか。

これも口辺で大きく広がっている土器[△]図-165。しかし突起の姿は大きくちがう。まるで生き物のように流れゆらめく立体。これなら、燃える炎の中に見える「ある瞬間のイメージ」といえるかもしれない。これ



はねんど紐を付けるのではなく、溝を掘ったり穴をうがったりして内部に掘り進むことによってできていくように見える。そこで、回転する部分の中心では掘り残された壁が立ったり、うがたれた穴は中空部分まで進入したりする。凹部の空間に魅せられる立体。この土器の出土部分は容器の下部と四つの突起の一部だったらしい。図の正面の突起は、さいわいにもそのほとんどが出土したようだ。

ここではめずらしくほっそりとしたやさしい輪郭の土器[▲]166[▼]。側面の細かい文様は同じ幅の二本線で描かれる。上に載せられた中空の立体はぎゅっとにぎったらずぶれそうに繊細な造りだ。ほっそりとした輪郭も細かい文様も繊細な立体もここまでひかえめに表される。その姿をしばらくながめる。

両脇にあるのは取っ手が注ぎ口か[▲]167[▼]。この大きさなら、両手に持って中の液体を回し飲みすることもできる。いや、もっと大事なことに使うのかもしれない。

下でふくらんだ胴の文様は直角と巻いた円だ。少し固いが位置をずらした配置がおもしろい。

部屋をめぐって出口の近くにこれを見つけた[▲]168[▼]。少しガラス棚が高いので見やすいとはいえないが明かりは十分だ。こんな雰囲気（きふんき）の土器をどこかで見たように思う。右上から斜めに下りる模様は反対側にもあるようだ。意味のある記号が詰め込まれているようにも見えるがそんなことはないのだろうか。容器の上にも何かが載っている。残念ながらよく見えない。

昼頃、土器を一通り見終わって民具が展示されているという収蔵庫へ向かう。正面の入り口は開け放してあるが、内側には木の引き戸でできた頑丈な網戸がある。「この戸は必ず閉めてください。」と張り紙がされている。目の細かい網戸を立てて小さな羽虫も入らないようにということなのだ。中は資料館の3階より広いようだ。室内の展示の並び方は資料館と同じで入り口から左右に分かれた通路を一周できる。これは収蔵



庫とされているけれども、実際にはよく整えられた展示室だ。周囲の壁面は、手前に大きなガラスをはめて中を明るくし、かつて農作業などに使われていたいろいろな道具や衣服が展示されている。その中の奥行きは1間近くあるだろうか、床に畳表が敷き詰めてある。

衣服の展示では、壁に袖の短い半天様の上着がたくさん掛けられ、畳表の上に身につける小物類が並べられている。色が薄く褪せたものもある。ほとんどが紺色か藍色だ。落ち着いた色調の選択は、他の色を禁止された結果かもしれないが、人々の好みも反映しているのだろう。この展示の背中合わせに「あんぎん編み」の展示が端から端まで続く。その一つ一つの展示に「国指定・重要有形民俗文化財」と記された名札が付いている。壁面には「あんぎん編み」の簡単な衣服が並べて掛けられている。一番手前のものは紺色に染められ、同じ幅に編まれていて前開きだ。編み方にもよるのだろうか、これは思ったより編み目が細かく見える。肩の部分の小さなほつれや、裾がわずかにすり切れているなどが見られ、明らかに実際に使われていたものだ。床には大小の編み機が並んでいて手前の編み機では編みかけた状態で見せている。両端を支えられた「けた」には細かく刻み目が付けられ、刻み目の一つ一つに縦糸が下がって、その1本1本に「こもづち」がぶら下がる。畳表の上に「アカソ」の繊維が置かれている。

民家の中に入る。さっそく、あの屋根の穴を見上げる。屋根の木組みの間にわずかに明かりが見える。もともと下を向いた穴だから中を照らすほどの明かりではない。屋根裏は真っ黒にすすけていて反射光もない。今日は土間の戸口を開け放って光が差しているし、建物の奥には明かりも点いているから明かり取りとして目立たないのかもしれない。排煙口としては位置がおかしいと思う。それとも、あの形だと雪が吹き込まないから煙出しや換気のために開けるにはいいのだろうか。土間は広い。土を固めたものではなく、表面は細かい砂利状だ。簡単な敷居で二つに仕切ってあつてある。一方の土間には中央に四角く炉が切つてあつて、自在鍵に鉄瓶が下がっている。昔、このまわりにむしろを敷いて家族が火を囲んだのだろう。土間の奥の鴨居の上に小さな神棚が上がっていて、

その下の柱に「にわ」と紙に書いて貼ってある。その左手には畳の部屋と板の間が続いている。もう一方の土間は右手に牛を入れる部屋と炊事場が続く。戸口はそれぞれの土間に開く。炊事場には切り出した石を丸く組んで置いた「かまど」があり、地面を掘り下げて焚き口になっている。今、そこには大きな飯釜がぴったりと収まっている。この二つの土間の境には、たぶん、戸を立てるかすだれを垂らすかしたかもわからない。

四角い炉に近い壁に全紙大の掲示があり、「この家の内壁に貼ってあった文書で、家の歴史を知ることのできる資料の一部です。」とある。毛筆で書かれた和紙はみな茶色くなっている。もっとも古いのは「寛政10年（1798年）今から「204」年前のものです。」と書き添えたものだ。なかには和紙が濃い焦げ茶色になってしまったものもある。戸口の内側には「むしろ」を編む仕掛けが、これも編みかけの状態にして立ててある。仕掛けは「あんぎん編み機」に少し似ているが編み方そのものはまた別のようだ。

外に出ると、昼時になったらしく作業をしていた人たちが昼食をとっている。若い母親も連れてきた幼児に何かを食べさせている。表の道の水路ではきれいな水が音を立てて流れる。大きなネムノキが淡い色の花をいっぱい付けて資料館の三階近くまで葉を茂らせている(写真)。



十日町市を過ぎて川口町に至る。以前、同じように北上して来たときは17号線に出ようとして町中で手間取った。ここで信濃川を渡るうとしたからだ。今回は越後川口から高速で新潟まで走る。新潟空港に近づいて、まだ先があるという表示。今は、村上市まで日本海東北自動車道というのが開通している。しかし、まもなく上下対面通行になる。これでは一般道路と変わらない。今日はまだ時間に余裕があるので、新発田市で国道7号線に移る。ようやく村上市に入ったかと思うとすぐ朝日村に入る。今日の泊まる場所は、事前に奥三面歴史館に電話をして村内の宿泊施設を紹介してもらい予約をしている。そこは、以前に来たときにも休憩したところらしい。

それは「道の駅 朝日」の中にある。前回はここに併設されている「日

本玩具館」と「シルクフラワー制作工房」というのを見た。ほかに温泉や物産会館などいろいろある。敷地の奥に「休養・宿泊施設」という建物が何軒か建っていて、その1軒をあてがわれる。鍵を受け取って車を建物の横に止める。建物の中は、たった一人で使うにはもったいないつくりだ。二階建て1階にはふつうの家と同じような器材と設備が整えられている。二階は三方に窓があり、シングルベッドが五台すぐ使えるように整えられている。この施設は家族や小グループの宿泊を想定したものだ。車から荷物を運び入れていると急に雨が降り出した。

夕方近くなって、温泉につかるために玄関を出る。この建物は2軒つながっていて反対側の端にも玄関がある。同じ造りが背中合わせになっているのだ。少し離れて見上げると、ちょっとした洋風の小住宅というたたずまい。傘を差して、広い施設の中を大回りに歩いてみる。途中に起伏のある公園のようなところに出る。木の茂った中にガクアジサイがこんもりとたくさんの花をつけている。それがあまりにも目立つのでさらに歩いていく。青紫の花が淡い光を放つように鮮やかに見える。しばらく近くに立って眺めてから、明日の朝、もう一度来て写真に撮ろうと決める。表通りが見えるところまで来ると物産館がある。入り口から見ると、もう片づけ始めている。「いいですよ。ぜひご覧ください。」というから中に入っていくと、すでに商品には布の覆いを掛け始めている。やっぱり外へ出て、表通りからもう一度温泉施設への道を入れて行く。この先に立ち寄り温泉場のための駐車場があって、このあたりの人たちだろう、つぎつぎと家族連れの車が入ってくる。